
ゼロと賢者と魔王サマ！？

悠梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと賢者と魔王サマ！？

【Nコード】

N8019X

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

正義感と負けん気が人一倍強いおれ、渋谷有利。とちよこつと頭のいい高校生、村田健。しかし実は異世界の王様・ゲームのラスボスの魔王サマと転生4000年分の異世界の記憶がある高校生！その二人が、ハルケギニアに使い魔として召喚されちゃった！？

プロローグ（前書き）

… 本編からのセリフの使い回しが多いと思います。

プロローグ

……おれはなかなか幸せな人生を送ってきたと思う。

おれの名前は渋谷有利。

…原宿は不利じゃないからね！

ごくごくフツの黒髪黒眼の高校生。

そして、

魔王です。

なぜかと言うのは不良に絡まれた中学の時の知り合い・村田健を助けて返り討ちに逢い、トイレの便器に顔を（思い出したくないため中略）と思ったら欧風異世界についていて、超美形な人に、

「おめでとうございます、今日からあなたは魔王です！」

なーんておめでたくない宣言をうけて眞魔国（略称）の魔王に就任して、優秀すぎるが一癖も二癖も三癖もある部下を持てて、さらに、決闘したり、他国のトップと会談したり、密航したり、絶食したり、誘拐されたり……。

……波瀾万丈ダナ。

「はあ……」

「どーしたの、渋谷ー？」

隣でノンキに聞いてくるのは村田健。

さっき言ったように不良に絡まれていた所を助けたのだが、ある日眞魔国に行ったときに一緒に来てしまい、その際に眞魔国を作った眞王の右腕・大賢者サマの生まれ変わり〜と言うことが判明した。今では仲良く眞魔国の未来について相談する仲だ。

「いや〜、おれって波瀾万丈な日々を送ってきたな〜と思って」

「確かにね〜、フツの高校生は王様じゃないもんね〜」

こうしてると4000年以上の記憶を持つとは思えないんだよな！。

「……ん？ おーい、渋谷ー」

「なんだー、ムラケンくん」

「あれ、ナニー」

村田が指差したのは……。

「…鏡？」

そう、光る鏡。

「眞魔国に行くときはいつも水を通して行つたよねー」

「…オイ、ちよつと待て、これって危険じ……」

「ま、行つてみようよー」

と言つや否や、足をつっこむ村田。

「のわ、引つ張られる」

「えつ、ちよ、ムラケン、ズボンを掴むな、脱げ、脱げる」

そんな緊張感のない会話をしながら鏡の中に吸い込まれる元凶（村田）とおれ（被害者）。

「な、なあ、眞魔国行く時となんか違うぞ」

「あ、ほんとだー」

「ほんとだーじゃねーぞ、ほんとだーじゃー！」

「でももう手遅れじゃないー？」

「ナニー！？」

そこまで話した所で、おれ達は鏡に飲み込まれたのでした……。

プロローグ（後書き）

今日からマのつく自由業！をしらない人でもわかるように書いたつもりですがどうですか？ 意見をお願いします。

第一話

?side

ドカーン、と言う100人中99人が爆発だと断言する音が響く。
また失敗だ。

何をしているかと言うと、使い魔召喚の儀式である。

しかし、現れるはずの使い魔は全く現れず、起こるのは爆発ばかり。
「ミス・ヴァリエール、今日はここで止めにしませんか？」

輝く頭部の教師、ツルベ……コルベールが言う。

「ミスター・コルベール！ しかし……！」

「分かりました、もしも次失敗したら召喚は明日にしましょう」

コルベール……いや、ツルベールにとっては精一杯の譲歩なのだろう
が、私にとっては最悪だ。

『ゼロ』のルイズと蔑れてきたが今日こそはその汚名を返上したい
のに！

「ルイズー、頑張りなさいよー」

につくきツエルブストーの声援が聞こえる。無視だ無視。

絶つつ対凄使い魔を召喚するんだから！

「宇宙の果てのどこかにいる私の下僕よ！ 神聖で美しく、そして
強力な使い魔よ！ 私は心から求め、そして訴えるわ！ 私の導きに
答えなさい！」

ドン、とひときわ大きな爆発音が響きわたる。

もくもくと立ち上る砂煙の中から黒い何かがちらつと見えた。

やった！ やったのよ！ 何かは分からないけど使い魔を召喚した！
表面上は落ちていて、内面ではるるんと滅多に歌わない鼻歌まで
歌っていた私だった……、

「おい！ あれを見る！」

「平民だぞ！ ゼロのルイズが平民を召喚したぞ！」

その熱は言葉によってあつという間に冷まされた。

……平民？

砂煙が晴れてようやく視界が良くなると、そこには人間がいた。

渋谷有利 side

「いててて……」

仰向けに倒れていたが、頭が痛い。

階段から落ちた時のように痛い。

ぐしゃ。

「え？」

村田健を潰していた。

「わー、スマン村田あ！ 成仏してくれえ！」

「人を殺さないでくれよ……」

あ、生きてた。

「で、ここは眞魔国……」

「おい、あれを見る！」

「平民だ！ ゼロのルイズが平民を召喚したぞ！」

思いつき馬鹿にしたような笑いが起こる。

気分のいいもんじゃないね、うん。

「……じゃなさそうだね」

と言いかけた言葉を訂正して村田が日本人としてごくごく普通の黒髪を引っ張る。

「なんで分かんのか？」

「双黒双黒って騒がれないからね」

そうなのだ。双黒、つまり髪も眼も黒い人は不老長寿の妙薬って言われていて、食材扱いなのだ。

あれは悲しかった、スーパーに並ぶ魚の気持ちがあった気がする。

「てか、平民かー、魔王から平民って凄い差だね」

「大賢者から平民も凄いけどねー」

二人で言葉のキャッチボールをしていたのだが、

「え、ちょ、眞魔国じゃないならここどこ？」

「原点まで戻るのに時間かったね」

「いや、そこじゃないだろ」

二人で話していると桃色の髪の子が一步こつちへ踏み出した。

「あの子可愛いね」

「えー？ 君のこのフォンビーレフェルト卿のが可愛くないかい？」

「いや、ヴォルフは別だろう、男だし」

と言いながらあの金髪碧眼を思い浮かべる。

うん、確かにそこの女の子顔負けには可愛い。

そんな会話をしているとあの桃色の髪の子が髪が絶め…（言う
と可哀想なので）している男にためよっている。

「ミスター・コルベール！」

第一話（後書き）

有利の口調がわからない……

第二話（前書き）

プロローグと第一話を修正しました。

第二話

ルイズside

私はそいつらを見てガッカリした。

いや、ガッカリどころじゃない。

何で上手くいかなかったの？ マントも着ていないし、絶対平民だ。けど、使い魔にはするべきだ。

そう思って一歩踏み出すと、

「あの子可愛いね」

「いや、君のこのフォンビーレフェルト卿のが可愛いくないかい？」

使い魔の平民がしている会話が聞こえてきた。

なんなの、コイツら？

平民の分際で貴族を無視して！

「ミスター・コルベール！」

大声で怒鳴るとツルベールと呼びたくなるような頭のヤツが進み出る。

「なんだね、ミス・ヴァリエール」

「あの！ もう一回召喚させてください！」

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか！」

このツルツパゲが！ と言う本音を隠しつつ怒鳴る。

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今やっているとおりだ」

「知っています！」

焦れる気持ちを押さえつつ、怒鳴る。

「それによって現れた『使い魔』で今後の属性を固定し、それにより専門過程に進むんだ」

呼吸が、

「一度呼び出した『使い魔』は変更することができない」
止まった。

「何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼らを使い魔にするしかない」
冗談じゃない。

「でも！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことはありません！
ましてや二人だなんて！」

怒鳴った時、

今まで傍観者になっていた使い魔の平民の一人、眼鏡をかけていない方がおずおずと言った。

「えっと……ここ、どこですか？」

村田健side

ここ、どこだろう？

眞魔国ではないことは確定だ。

眞魔国にはこんな黒いマントの集団はなかったはずだ。

向こうの方には石造りの大きな城が見える。

それに豊かな草原。

こんな所は眞魔国にはなかった。

周りにいる少年少女達はみな同じような黒いマントを着ている。

小シマロンか、大シマロンか……？

聖砂国は論外。

聖砂国には基本白っぽい？ 人しかいないからだ。

ここには赤やら青やらピンクやら、いろんな色の髪の人がいる。
いや、ちよつと待て。

確認。

現在僕は髪を染めていない。

つまり黒髪。

現在目にカラーコンタクトレンズを入れていない。

つまり黒眼。

なのに双黒双黒と騒がれない。

眞魔国の裏側でも双黒は不老長寿の妙薬、と名高いのに騒がれない。
結論。

もしかすると眞魔国がある方の異世界じゃない異世界？

分かりにくいな。

つまり、地球でも眞魔国でもない異世界？

これはヤバイ。

まだ理解していなさそうな渋谷に声をかける。

「おい、渋谷ー」

「なんだー」

声をかけたのはいいのだが、結論までたどりつかない。

桃髪少女（仮）がこっちに向かって一歩踏み出した。

「あの子可愛いな」

「君のこのフォンビールフェルト卿のが可愛いくないかい？」

ああ、また話がそれた。

無理されて怒ったらしい桃髪少女が怒鳴る。

「ミスター・コルベール！」

人垣を割って中年の男が現れた。

大きな木の杖を持ち、黒いローブに身を包んでいる。頭は……光を
反射している。

なんだか……デジャヴ？ を感じる光景だな。

第三話

渋谷有利 side

「……へ？」

あのルイズ？と言っらしい桃色髪の女の子が呼んでいた先生らしき人を見て、ぎょっとした。

大きな木の杖に、黒いマント。まさに典型的な魔法使いと言う服装だったからだ。

まあ、ついでに言えば、真魔国の兵士のダカスコスと言う兵士の頭…光を反射する頭部が少し似ていた。

「もう一度召還させてください！」

「それはだめだ」

「そうしてですか！」

二人が言い争っている。

召還？ なんのことだろう。

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今やっているとおりだ」

「知っています！」

つ、『使い魔』あ？

「それによって現れた『使い魔』で今後の属性を固定し、それにより専門過程に進むんだ」

な、何のこと？

「一度呼び出した『使い魔』は変更することができない」

「何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼らを使い魔にするしかない」

「でも！ 平民を『使い魔』にするなんて聞いたことがありません！ ましてや二匹だなんて！」

ルイズが怒鳴っている。

一体何なんだ？ さっきから使い魔、だの召還だのと。

「えーっと…あの！」

声をかけてみたが聞こえなかったようだ。

「あの！」

やっと気づいたようでこちらを振り向いた。

皆の視線がおれに集まる。

少々緊張しながら、おれはここに来てから一番の疑問を口にした。

「あの…ここ、どこですか？」

村田健 side

ルイズ？ に呼ばれて中年の男が出てきた。

その男の格好は、大きな木の杖を持って、黒いマントを羽織っている、と言いついかにも魔法使い、と言っ感じの格好だった。

「もう一度召還させてください！」

「それはだめだ」

「そうしてですか！」

しよ、召還？

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今やっているとおりで」

「知っています！」

つ、『使い魔』あ？

「それによつて現れた『使い魔』で今後の属性を固定し、それにより専門過程に進むんだ」

な、何のこと？

「一度呼び出した『使い魔』は変更することができない」

「何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼らを使い魔にするしかない」

「でも！ 平民を『使い魔』にするなんて聞いたことはありません！ ましてや二匹だなんて！」

に、二匹？ 僕らは人として扱われないのか？

相つつつ当変な所に来てしまったようだみたいだな……。

そんなことを考えていると、渋谷は意を決したように声を上げた。

「あの！」

観衆が渋谷に注目する。

僕も観衆の一人として渋谷に注目する。

「あの……ここ、どこですか？」

「ありゃ……」。

予想してたことだけど、やっぱり渋谷は気がついてなかったようだ。

———ここが、眞魔国でも地球でもない異世界だと言うことに。

「渋谷あゝ」

「な、なんだ、村田？」

「実はさあゝ」

「さあゝ？」

「ここ、眞魔国でも地球でもないみたいなんだよねゝ」

「へゝ……って、はあああ！？」

渋谷有利side

「む、村田！？ ど、どとどとういうことだよ！？」

村田があつさりと言った言葉におれはぎょつとした。

「ぐえっ！ く……び」

「あ、ああ！ わ、悪い」

村田をゆすつていたら村田が窒息しそうになっていたから慌てて手を離す。

「えーつとね、まず一つ」

指を一本立てる。

「双黒って騒がれない」

「あ、なーるほど」

「二つ」

指をもう一本立てる。

「勘」

「へー…ってなんだその適当加減！」

「以上」

「以上じゃねえよ、以上じゃ！」

そんな馬鹿騒ぎをしていると、

「私を無視するんじゃないわよ！ 使い魔の分際で！」

と起こった声がして、ルイズと言っらしい女の子が腰に手を当てて威張っていた。

第四話（前書き）

総合ユニーク1000突破感謝です！

ちなみ作者は村田が大好きです！。

ということ村田を贔屓しております、ご了承ください。

第四話

渋谷有利side

「はい？」

思わず啞然とした。

「つ、つ、使い魔あ？」

一瞬固まって、

「ムラえもん」

「なんだい？」

「使い魔って、何？」

それは予想していなかったのか、村田と他の観衆（桃髪少女を除く）がガクツとする。

「だからね、渋谷」

「へ？」

「ここは異世界だから、いくら大賢者でも分からないの」
「……」

数秒黙って、

「マジですか!？」

絶叫した。

ルイズside

何なの、何なの、こいつら！

注意したというのに丸無視で！

一体何だってこんなのが私の使い魔なのよ!？

「ミスター・コルベール」

なんでこんなのと契約しなくちゃならないの。という気持ちを込めてツルッパゲに向かって視線を送る。

しかし、

あんの忌々しいツルツパゲは首を振った。そして、あの馬鹿騒ぎしている使い魔達の方を指差す。

大方、さっさと契約しなさい、と言う意味だろう。

イラつきながらも、ギョツと杖を握りしめて、眼鏡をかけていない方の前に立つ。

「んあ？」

きよとん、とした様子で私を見下ろす（ム力つく奴ね！）使い魔に向かつて怒鳴る。

「あんた、感謝しなさいよね！ 貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから！」

「え……」

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

呪文を早口で唱え、さっさとすましてしまおうと、ムードも何もない仕草で使い魔の唇と自分の唇を合わせる。

「終わりました」

羞恥で顔が燃えるように熱い。

「なっ……一体何を……っ」

使い魔は何かを言いかけて、さっきの……ほにやらを思い出したのか、どもる。

「よかったねー。渋谷ー」

眼鏡をかけている方がシブヤ、と言っただろうか、使い魔を冷やかす。

「なっ、村田、そんなんじゃ、ぎえあっ！？」

使い魔が変な声と同時に痛みで顔を歪める。

ルーンが刻まれ始めた様だ。

「おーい、渋谷ー、って何！？」

どういいう仕組みか知らないけど、もごもご……していないのに、眼鏡をかけている方にもルーンが刻まれ始めた。

どうなってるの？

渋谷有利side

「っ、…っっ…」

何が何だか分からないが、あの桃髪少女にキ…もごもごされたら、左手が焼かれているような痛みが走った。

やっと痛みがやんで左手を見ると、何やら変な文字が刻まれている。

なんだか刺青みたいだ。

「村田」

頭のいいやつAを呼んでみる。

「おーい、渋谷ー、君の左手には変な刺青はあるかい？」

「ある」

左手を持ち上げて村田に手の甲を見せる。

「ふーむ、僕のと君のはおんなじ文字みたいだ」

「みたい？」

「僕はここの文字と知らないからね」

ルイズside

「ちよつと！ その平民二人！」

またまた無視されて、怒鳴る。

眼鏡をかけた方に振り返られたが、ふい、と視線をそらされてしまった。

「あんた達が変な文字って言うてる奴はね、使い魔のルーンよ！」
「なんとか注意をひけたようだ。」

「「はあ？」」

異口同音で返された。

「今日からあんた達は私の使い魔だから！」

「「はあ!？」」

「はあ!？　じゃないのよ！　ほらほら、あんた達、ついてきなさいよ！」

さつさと歩き出すと、あわてて使い魔どもがついてきた。

「ちよつと待った、一体どういう意味だ!？」

眼鏡をかけてない使い魔が聞いてきた。

「そついや、名前聞いてなかったわ。名前は？」

「こつちの質問丸無視かよ!？　まいいか、おれの名前は渋谷有利」

「原宿は不利なんだよね」

「ややこしくなるからお前は黙ってなさい！」

どつかから出したハリセンで眼鏡の頭を叩くユーリ。

「それにしても変な名前ね、ユーリって女の子の名前でしょうが」

「文句あらコンラッドに言ってくれ！」

コンラッド？　誰それ。

「で、あんたは？」

さつきから変なことばかりいつている眼鏡のほうに言う。

「僕？　僕はいろいろ呼び名はあるけどまあとりあえず村田健」

「とりあえずって何だよ!？」

ツッコむユーリ。

「えーっと、聞きたいなら、大賢者とか猊下とか前世ならアンリ・レジャンとか……」

とうとうと変なことを言い出すムラタ。

全く何言ってるの？　猊下って言ったらマザリーニ枢機卿なのに…

…。

「んで？　さつきから言ってる使い魔使い魔って何のこと？」

急に真剣な顔になったムラタに思わず気圧される。

第四話（後書き）

有利のキャラがわからん…。
どんどんキャラ崩壊していく…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019x/>

ゼロと賢者と魔王サマ！？

2011年11月15日11時34分発行